4技能を統合した中上級読解授業のオンライン実施とその結果

―2020年度春学期名古屋大学国際言語センター「NP5読解表現」の実践報告―

閔　ソラ　香川　由紀子

要　旨

本稿では、2020年度春学期に名古屋大学国際言語センターで実施された「NP5読解表現」の実践報告を通して、4技能を統合した中上級読解授業のオンライン実施とその結果について述べる。

「NP5読解表現」の授業では、中上級レベルの学習者を対象に、様々なテーマの読み物をテキストにし、「読む」だけでなく「聞く」「話す」「書く」にも比重をおいて、音読、学習者間の意見交換、作文（ピア・レスポンス）、発表などのアウトプット活動を多く取り入れた。また、①自習時間とZoomの時間の分離②丁寧なフィードバック③ペア/グループワークの重視④教材の視覚的な提示⑤総まとめとしての発表に留意し、オンライン授業を実施した。

その結果、授業評価アンケートで肯定的な反応が見られ、4技能を統合した読解授業は学生の満足度及び能力向上において効果が高く、実施方法に留意すれば、オンラインで実施しても十分効果的であることが明らかになった。

キーワード

読解教育、4技能、アウトプット、ピア･ラーニング、オンライン授業、実践報告、日本語教育

1．はじめに

本稿では、2020年度春学期に名古屋大学国際言語センターで実施された「NP5読解表現」の実践報告を通して、4技能を統合した中上級読解授

業のオンライン実施とその結果について述べる。2020年に入り、世界各地で新型コロナウイルスの感染者数が急増し、日本でも３月から留学生を含めた外国人の入国制限が始まった。また、社会全体でも感染拡大を防ぐために、三密（密集、密接、密閉）を避け、ソーシャルディスタンスを保つように様々な対策が提案され、教育現場においても対面授業を止め、一時休業やオンライン授業を実施するようになった。このような社会状況を受け、名古屋大学では2020年度春学期に新規交換留学生を受け入れないことを決定し、国際言語センターの全ての授業がオンラインで実施されることになった。本稿では、このような背景の下で、中上級レベルの日本語学習者対象の、４技能（読む、聞く、話す、書く）を統合した読解授業の内容及びオンライン実施方法とその結果を報告することを目的とする。

２．先行研究

言語教育において、「読む」「聞く」「話す」「書く」の４技能を個別に取り入れるのではなく、統合的に取り入れる授業の必要性とその効果は、多くの先行研究において指摘され、検証されてきた。金城（1994：53）は、外国語教育において、教室活動として最も理想的なのは、言語の４技能と一般的に言われる、読む、書く、聞く、話すを統合的に学習できる授業状況を設定していくことと、学習者の興味や関心、知的欲求に応じた内容を学習項目として組み込んだカリキュラムを構成することであると指摘している。実際、大塚・植田（1994）では、日本語学校で行った４技能を総合的に発揮するビデオ制作活動により、学習者が自分の日本語に自信を持ち、日本語力向上意欲が刺激され、能動的な学習への転換が見られたと述べている。また、栗下･伊東（2018）では、中学校での英語教育において、多読に加え、読んだ本に関して英語で話し合い、作文を書き、教師が読み上げる作文を聞くなどの一連の活動により、学生達の意欲と英語力を向上させる効果があったと述べている。また、鄭・沖田・木戸・田中・ブッシュネル（2014）では、大学の短期留学生対象の初級後期クラスで、文章を読ませ、それをもとに作文を書き、クラスメートと作文を読み合い、議論を

深めることを通して、４技能を総合的に学び、学習者の主体的な活動が構築されたと報告している。このような先行研究を踏まえ、NP5読解表現の授業でも、学生の日本語力の向上、意欲の向上、学生が主体的に学ぶ授業を目指し、「読む」だけでなく、「話す」「聞く」「書く」にも重点を置き、４技能を統合的に伸ばすことができる活動を授業に取り入れた。しかし、このように４技能を統合した授業全体をオンラインで実施した授業に関する先行研究は管見の限り見当たらず、このような現状を踏まえ、本稿では４技能を統合した中上級読解授業のオンラインでの実施内容と方法、及びその結果について記述することにする。

３．実践報告

３．１．授業の概要

本稿の報告対象のクラスは、名古屋大学国際言語センターのNUPACE（Nagoya University Program for Academic Exchange、名古屋大学短期交換留学受け入れプログラム）の日本語コース（全７レベル）の中で、中上級に当たるレベル５（NP5）の「読解表現」科目である。2020年度春学期の「NP5読解表現」の授業は、４月17日から８月３日まで15週間、週２回（毎週月曜日と金曜日）30コマ（１コマ90分）、計45時間実施された。

本授業は、「読む」だけでなく、「話す」「聞く」「書く」活動を加え、日本語能力の全体的な向上を目指して構成している。授業の中で、学習者はただ単にテキストを読んで終わるのではなく、テキストの内容を読んで把握した上で、それに関する互いの意見を聞いたり、話し合い、さらに発表と作文を通して自分の考えを表現することが求められる。具体的な授業目標、授業の方法は後述する。

2020年度春学期の「NP5読解表現」の受講生は、モンゴル、香港、イタリア、イギリス、オーストリア、スイスから来た交換留学生の６人だった。６人とも2019年度秋学期にNP4を受講した継続生である。このうち、スイスの学生だけは2019年度秋学期が終わった後、自国に帰っている間に新型コロナウイルスの流行により日本に戻ることができなくなったためスイ

スの自宅で、他の５人の学生は名古屋大学の寮で自分のノートパソコンを使って授業を受けた。

３．２．授業の目標と内容（シラバス）

読解の授業は、学習者が読み教師が解説をするというインプットに偏った授業がイメージされがちである。しかし、読み取った内容を自らのことばで他者に解説したり、内容についての意見を述べたりすることによって、学習者は内容を深く理解することができる。つまりアウトプットがあってこそ、学習項目を定着させることができる。NP5読解表現では、このようなインプットとアウトプットの関係を学習者にも意識づけ、「読む」だけでなく「聞く」「話す」「書く」にも比重をおいてシラバスを構成した。

無論、口頭や文章で表現する能力そのものを伸ばすねらいも含まれている。「書く」「話す」の学習はひとりで行なうことはできても、フィードバックが得られなければ上達を実感するのは難しい。そのため「書く」「話す」を授業に取り入れ、フィードバックにも重点を置いているが、オンラインでの授業に移行してもそれらが十分にできるように配慮した。

またインプットにおいても、教師からの一方向的なものではなく、教師と学習者、学習者同士のインタラクションに留意した。犬塚･清河（2013: 98）は、他者がモデルを提示することで学習者は読解方略を獲得し、読解を行うことを促進するが、そのモデルは学習者に近い存在であるピアによって示されることで、より効果的になると述べている。ピアで意見を交換したり書いたものを読み合ったりすることで学習者が気づくことは多く、足りない点を補い合い、刺激を受けて日本語能力を向上させることにつながると考えられる。

以上のことからNP5読解では、以下のように授業目標を設置した。

・説明文、意見文、論証文などを読み、筆者の意見やその根拠を理解し、その内容を短くまとめることができる。（120字ぐらい）
・説明文、意見文、論証文などを読み、その内容をわかりやすくクラス

メートに説明することができる。
・文章からの情報、インタビュー、調査の結果を引用しながら、わかりやすい構成の作文（400字ぐらい）を書くことができる。
・文章からの情報、インタビュー、調査の結果を引用しながら、わかりやすい発表をすることができる。

授業では（1）～（8）のテーマの読み物を取り上げた。説明文、意見文、論証文、調査結果、インタビュー記事、エッセイ、物語（生教材含む）などテーマは多様で、これらは中上級の日本語学習者が読んで理解でき、それについて意見交換やインタビュー、調査、発表、作文などの応用活動につなげられるものである。

（1）米の輸入問題
（2）少子高齢化
（3）死刑制度廃止論
（4）夫婦別姓制度
（5）何かを選択すればゴールに近づく
（6）進路選択
（7）コミュニケーションの日本語
（8）日本文化に関する読解教材

これらは2019年度秋学期の内容を引き継いでいるが、オンライン授業に移行するにあたって変更した点がある。まず、フィードバックの時間を確保するため、応用問題とアンケート調査を扱った読み物を取りやめ、日本文化に関わるトピックの読み物を3回入れた。これは、読んだ後に実際に日本人を対象にアンケートを作成・実施・報告の活動をすることが状況から見て難しいこと、前年度の学習者から社会問題以外に身近な話題を扱ったものを読んでみたいという声があったことを踏まえている。日本文化に関する教材は、1回目はエッセイ「漆黒の伝統」、2回目は「七夕の物語」、

３回目は「ことばとジェンダー」を選択した。それぞれ、食文化とオノマトペに触れること（１回目）、年中行事を知り自文化と比較すること（２回目）、日本語に表れる性差について考えること（３回目）を目的とした。

また、１課分（ひとつの読み物）を３回の授業で終わらせる方法をとっているが、難解と思われる読み物については４回にした。通常は、１回目に内容確認の小テスト・音読・予習シートに基づく話し合い、２回目に小テストのフィードバック・音読のフィードバック・内容の（再）確認、３回目に作文（課題としてある）のピア・レスポンスと発表を行う。しかしオンライン授業であることを踏まえて、「死刑制度廃止論」や「進路選択」など、内容理解や活動準備に時間がかかりそうなものに関しては回数を増やし余裕を持たせた。具体的な流れは、表１にシラバスの一部を記載する。

評価は、定期テストは行わず、「小テスト」15%、「音読」15%、「作文」30%、「発表」20%、「予習シート」10%、「クラスパフォーマンス」10%の計100%で総合的に評価した。「小テスト」６回、「音読」７回、「作文」第１稿７回、第２稿６回（最後の発表文は第２稿無し）、「発表」１回の成績に、「予習シート」７回の提出による点数、授業中の態度や参加度による点数を加え、総合評価した。

表１

	授業日	学習内容	課題提出期限
7	５月11日（月）	死刑制度廃止論－１　小テスト・音読・予習シート話し合い	
8	５月15日（金）	死刑制度廃止論－２　小テスト FB・音読 FB・内容確認	
9	５月18日（月）	死刑制度廃止論－３　補足・話し合い （課題）「死刑制度廃止論」作文提出 「夫婦別姓制度」予習シート記入・提出 音読練習	作文　5/24（日） 予習シート　5/21（木）
10	５月22日（金）	少子高齢化―作文ピア FB・発表 （課題）作文書き直し提出	作文書き直し 5/28（木）
11	５月25日（月）	夫婦別性制度－１	

12	5月29日(金)	夫婦別性制度－2 (課題)「夫婦別姓制度」作文提出	作文　6/4（木）
13	6月1日(月)	死刑制度廃止論－作文ピアFB・発表 (課題) 作文書き直し提出	作文書き直し 6/7（日）
14	6月5日(金)	日本文化に関する読解教材「漆黒の伝統」 (課題)「何をか選択すればゴールに近づく」予習シート記入・提出、音読練習	予習シート　6/8（月）

3．3．オンライン授業の方法

オンラインの授業にあたっては、メール、NUCT[1)]、Zoomを使用した。資料や課題のやりとりには主にNUCTを、チェックした作文の返却や諸連絡にはメールを用い、Zoomで教師とのやりとりやグループ活動を含む授業を行った。

本授業は、学習者によるアウトプットとピアでの学びによって4技能を伸ばすことを重視している。オンライン授業への移行に際しても、それが損なわれないように心掛けた。授業方法において留意した点は以下の通りである。

①自習とZoomによる授業の区分

オンライン授業では特に限られた時間の中でグループワークやフィードバックの時間を確保する必要がある。本授業では、各自が集中してひとりで行えることは前半の自習時間に配置し、後半はZoomでの教師やクラスメートとのやりとりやフィードバックに時間が有効に使えるようにした。また、自習時間にすることについては、学習者がひとりでも効率的に進めることができるよう、毎回授業開始前にメールとワードファイルで具体的に指示した（図1）。

NP5 読解　2020.5.15（金）の授業

8:45　出席　メールを返信してください。NUCT のチャットでも OK。

音読FB

・メールで音読 FB のファイルを送りました。このファイルに、ハイライトとコメント（右のボックスをクリックすると出ます）が書いてあります。これを見ながら、自分の録音を聴いてください。

・ハイライトとコメントに注意して、もう一度、音読の練習をしてください。

小テスト FB

・メールで小テスト FB のファイルを送りました。添削しましたから、直したほうがよいところを確認して、もう一度、自分の文章を読んでみてください。

テキスト解説

・NUCT の[お知らせ] ⇒「5月15日の授業」⇒「テキスト解説」のファイルをダウンロードしてください。音読 FB と小テスト FB が終わった人は、読んで、質問の答えを考えてください。

9:20　Zoom で授業

・Zoom にサインインしてください。

https://zoom.us/

ミーティング ID:

パスワード:

★8：45から9：20まで、わからないことがあるときは、NUCT のチャットルームで質問してください。メールでも OK です！

図1

具体的には、1回目の授業の音読と小テスト、2回目の授業の音読フィードバックと小テストフィードバックファイルの確認、3回目の授業の作文の自己修正を自習時間に入れている。従来は、音読はグループで行ない、録音してデータを提出していた。しかしオンラインに移行して機器の扱いに慣れないうちに、小テストをし、その後グループを作って練習し録音して自己評価までするには時間がかかりすぎることが懸念された。ただし音読は学習者が発話する貴重な機会であるため、オンライン授業でも残しておきたかった。そこで、音読は、NUCT の【小テスト】の機能を使ってひとりで行い、音声データを提出するようにした。

また、小テストはテキストを読みながら書きこむ形式であるため、自習にしても問題はない。自分で時間配分して落ち着いて書けるよう、音読と合わせて自習時間に配置し、NUCT の【小テスト】またはメールで提出できるようにした。

自習時間内の学習者とのやりとりは、NUCT のチャットかメールを用いた。授業開始時にチャットで挨拶することによって出席を確認し、途中で質問があれば対応した。

②チェックとフィードバック

自習を入れた分、チェックとフィードバックはより丁寧にすることを心掛けた。従来グループを見回ってチェックしていた音読は、録音を聞いて、発音・アクセント・イントネーション・文の切れ目など直す箇所をテキストに書きこみ、ひとりずつ返却した（図２）。グループ音読がなくなることによって他の人の発音を聞き学ぶ機会が失われるため、２回目の Zoom 授業時に、返却したファイルをもとに修正点に注意して再音読し、他の人の音読も聞けるようにした。

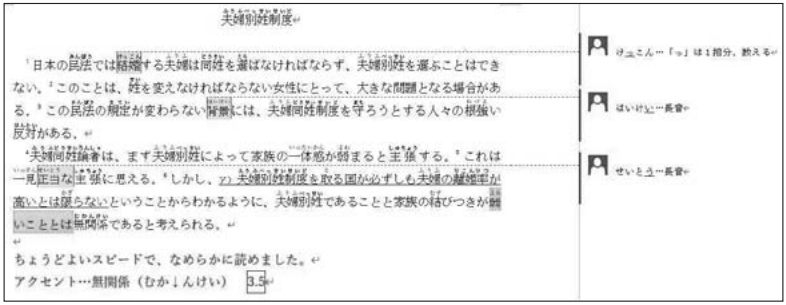
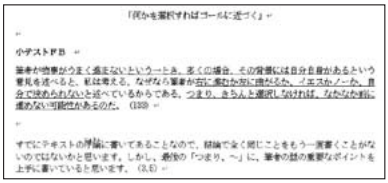


図２

小テストはテキストの内容を簡単に要約させるものだったが、これについても答えを書かせてそのまま終わるのではなく、コメントを書いて添削し、音読と同様、ひとりずつ返却した（図３）。

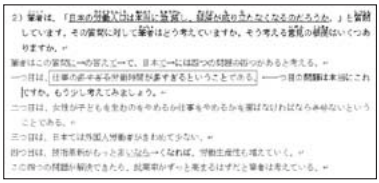

「何かを選択すればゴールに近づく」

小テストFB

筆者が物事がうまく進まないというーとき、多くの場合、その背景には自分自身があるという意見を述べると、私は考える。なぜなら筆者が何に魅力を感じ何に惹かれた、フェスカノーか、自分で決められないと述べているからである。つまり、きちんと選択しなければ、なかなか前に進めない可能性があるのだ。（133）

すでにテキストの序論に書いてあることなので、結論で全く関にことをもう一度書くことがないのではないかと思います。しかし、最後の「つまり、～」に、筆者の話の重要なポイントを上手に書いていると思います。（3.5）

図３


2）筆者は、「日本の労働人口は著しく減少し、高齢が高り高齢なくなるのだろうか。」と質問しています。その質問に対して筆者はどう考えていますか。そう考える意見の根拠はいくつありますか。

筆者はこの質問に～の答えて～で、日本に～には四つの問題の問題があると考える。

一つ目は、仕事の必要なる中間時間が多すぎるということである。――一つ目の問題は本当にこれ[illegible]ですか。もう少し考えてみましょう。

二つ目は、女性が子どもを生むのをやめるか仕事をやめるかを選ばなければならみ始めないということである。

三つ目は、日本では外国人労働者がきわめて少ない。

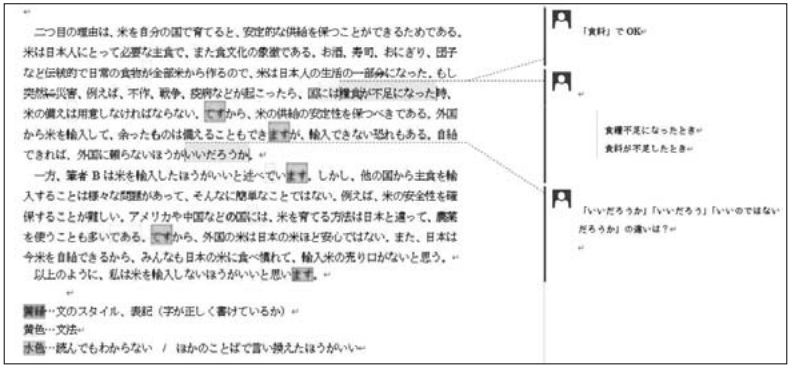
四つ目は、技術革新がもっと進んでいなければ、労働生産性も増えていく。

この四つの問題が解決できたら、就業率がぐっと高まるはずだと筆者は考えている。

図４

予習シートは前もって提出させ、文法や表現等をチェックして返却し（図４）、学習者が考えを述べることに集中して話し合いに臨めるようにした。

作文は文法、表記、意味が通じない部分に色別のマーカーをつけて返却し、自己修正を促した。ひとりで修正が難しいと思われる部分にはヒントやコメントを付した（図５）。これをもとにピア・レスポンスを行った後は、第２稿を提出させ、添削して返却した（図６）。


二つ目の理由は、米を自分の国で育てると、安定的な供給を保つことができるためである。米は日本人にとって必要な主食で、また食文化の象徴である。お酒、寿司、おにぎり、団子など伝統的で日常の食物が全部米から作るので、米は日本人の生活の一部分になった。もし突然に災害、例えば、不作、戦争、疫病などが起こったら、国には穀食が不足になった時、米の備えは用意しなければならない。ですから、米の供給の安定性を保つべきである。外国から米を輸入して、余ったものは備えることもできますが、輸入できない恐れもある。自給できれば、外国に頼らないほうがいいだろうか。

一方、筆者Ｂは米を輸入したほうがいいと述べています。しかし、他の国から主食を輸入することは様々な問題があって、そんなに簡単なことではない。例えば、米の安全性を確保することが難しい。アメリカや中国などの国には、米を育てる方法は日本と違って、農薬を使うことも多いである。ですから、外国の米は日本の米ほど安心ではない。また、日本は今米を自給できるから、みんなも日本の米に食べ慣れて、輸入米の売り口がないと思う。

以上のように、私は米を輸入しないほうがいいと思います。

青緑…文のスタイル、表記（字が正しく書けているか）
黄色…文法
水色…読んでもわからない　/　ほかのことばで言い換えたほうがいい

「食料」でOK

食糧不足になったとき
食料が不足したとき

「いいだろうか」「いいだろう」「いいのではないだろうか」の違いは？

図５

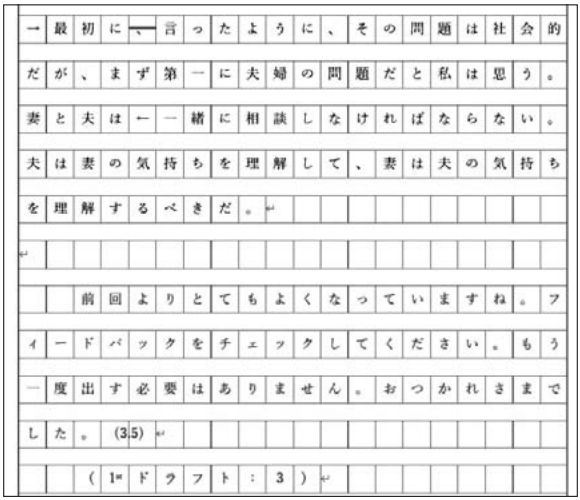

一最初に、言ったように、その問題は社会的
だが、まず第一に夫婦の問題だと私は思う。
妻と夫は一緒に相談しなければならない。
夫は妻の気持ちを理解して、妻は夫の気持ち
を理解するべきだ。
前回よりとてもよくなっていますね。フ
ィードバックをチェックしてください。もう
一度出す必要はありません。おつかれさまで
した。(3.5)
(1ページドラフト：3)

図6

③ペア / グループワーク

最も留意したのは、オンラインでの授業でいかにペア / グループワークを行うかである。先にも述べたように本授業はピアでの学びを重視しており、またこの活動を通してアウトプットの機会も増えるからである。

本授業では、学習者は課ごとの2回目の授業で、テキストのテーマに沿って600字～800字の作文を書く。例えば（3）死刑制度廃止論については、「本文中の死刑存置論者、廃止論者の両方の根拠を引用し、あなたの立場を書きましょう。ほかに根拠があれば書いてください」、（4）夫婦別姓制度については、「夫婦同姓制度、夫婦別姓制度、選択的夫婦別姓制度はどんな制度ですか。あなたはどんな制度がいいと思いますか。根拠も書いてください」など、提示されたテーマに対して根拠を明確にして意見を書くことを、宿題として課している。この作文に対するフィードバックは対面のときと同様ピア・レスポンスを行うことにし、Zoom のブレークアウトセッション機能を用いてペアワークをした。教師はまず、表記、語彙、文法、表現等の間違いに、色分けしたマーカーを付す。わかりにくい

部分にコメントをつけるが、この時点で添削はしない。学習者には、教師が付したマーカーを見ながら自己修正を行った後に、ペアで文法や表現をチェックし合い、その後で内容について互いに質問したり議論したりさせた。

池田・舘岡（2007：81-84）によると、ピア・レスポンスは、思考活動、他者とのコミュニケーション活動としての作文学習を実現させる一方で、書き手の内面がさらされる活動であり、単に学習者同士に作文を交換させ勝手なことを話し合わせてしまうと大きなリスクを生む。本クラスは全員が継続生であったため既に打ち解けた雰囲気ができていたこと、日本語能力が劣っている学習者もテーマに対して明確な自分の考えを持っていたことなどの条件が幸いしたが、他の人に自分の文法や表現の間違いを見られる学習者の気持ちを想定し、レベルの差や書かれた内容（意見）を考慮してペア（多くても３人）にした。組み合わせは、様子を見つつ変えるようにした。ペアワークの間に教師が各セッションに順番に入り、様子を確認し質問があれば対応するようにした。

受講者が全６名のため、内容についての話し合いやインタビューなど、ピア・レスポンス以外の作業も２人に分けることが多かった。ペアで話し合った後、メイン画面に戻ってペアの相手の意見を自分のことばで紹介したり、６人で考えを話し合うという方法をとった。

④内容理解のための教材提示

Zoom の授業における解説や予習シートの確認は、Word やパワーポイントのファイルを画面共有しながら進めた（図７、図８）。オンラインの授業では、学習者がテキストの正しい箇所を見ているか、進行中のタスクについてきているかなどを、全体を見渡して確認することが難しい。ファイルを画面共有することで、学習者全員が同じ方向を見て、進行具合を追いながら進められるようにした。マーカーやアニメーション機能を使って視覚的に理解を助けるようにし、学習者からの質問や意見、テキストの表現を使った文章作成問題の答えなどは、その場で書きこんで板書の代わり

とした。書き込みの入ったファイルは授業後 NUCT に再度アップロードし、学習者がダウンロードして見られるようにした。

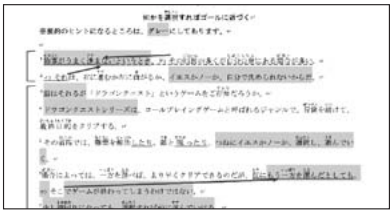


図７

図８

⑤発表

本授業では総まとめとして学期の最後に発表を行う。オンラインへの移行にあたって、原稿やパワーポイント資料の作成とチェックに関しては、作文と同じようにメールや NUCT を用いてやりとりし、マーカーとコメントで自己修正を促した。

発表はパワーポイント資料を画面共有し、２日に分けてひとりずつ行った。オンラインでは発表態度をチェックするのは難しいが、Zoom の画面で発表者の表情や視線を確認し、聞き手を意識しているか、困っていることはないかなどをチェックした。積極的に発言する学習者が多いクラスであったため、質疑応答は、質問やコメントがある人からマイクをオンにして発言させるようにした。発表は評価のために Zoom の録画機能で録画した。

３．４．授業の結果

３．４．１．授業評価アンケートの結果

本授業では、30回の授業が終了した後、国際言語センター全体の授業評価アンケートにいくつかの質問を付け加え、受講生６人の意見を集めた。その結果を以下に述べる。

まず、「NP5読解表現」そのものの評価に関わる表２の質問と回答から、本授業の受講生たちは授業の内容や方法に大体満足していたことがわかった。

表２

質問	回答
シラバスに説明されている目的と内容に沿って勉強できましたか。	「あてはまる」６人
先生の教え方は良かったですか。	
この授業内容を理解できましたか。	「あてはまる」５人 「ややあてはまる」１人
この授業に満足しましたか。	
課題は役に立ちましたか。	

また、表３から、自習時間と Zoom での双方向授業の時間の割合に多くの学生が満足し、多様なトピック、形式のテキストを取り入れたことも大変有効だったと判断される。なお、本授業の課題（予習シート、作文）は予想したより負担にならなかったことがわかり、オンラインでも十分効果的に実施できることが明らかになった。さらに、フィードバックに対する評価もよかったことから、学習者にただ読ませ、言わせ、書かせるだけでなく、それに対する教師のフィードバックも丁寧に行う必要があることが明らかになった。

表３

質問	回答
自習時間と Zoom の時間の割合は適切でしたか。	「ちょうどよかった」４人 「自習時間がもっと長いほうがいい」１人 「自習時間がもっと短いほうがいい」１人
授業で読んだテキストのトピックはどうでしたか。	「興味があるし、読みやすい」６人
この授業の課題が多くて負担を感じましたか。	「あてはまらない」２人 「あまりあてはまらない」３人 「あてはまる」１人
先生のフィードバックをチェックしていましたか。	「すべてチェックしていた」５人 「だいたいチェックしていた」１人
先生のフィードバックは役に立ちましたか。	「あてはまる」５人 「ややあてはまる」１人

次に、表４は、今回の授業の活動、４技能を統合した読解授業の効果に関わる質問と回答である。この結果から、テキスト、作文、ピア・レスポンス、フィードバック、予習シート、クラスメートとの意見交換、発表が

高く評価され、受講者は「読む」ことをもとに「書く」「話す」「聞く」活動を統合的に取り入れた授業が日本語力の向上に役立つと考えていることが分かった。特に、受講者は「書く」「読む」「話す」能力以外に、言葉、文法、発音のような日本語知識や発表、思考、コミュニケーション能力も共に上達したと感じていることも明らかになった。「聞く」能力が上達したと答えた人は2人だけに留まったが、これは「聞く」に焦点を合わせた活動を個別に導入していないことに起因すると思われ、今後改善策を考える必要があると思われる。また、受講者からの要望があった速読練習の導入に関しても今後検討したいと考える。

表4

質問	回答
この授業の中で、これからも続けて行ったら良いと思うところ、良くした方が良いところはどこですか。（記述式、3人回答）	すべてのテキストはとても面白かったと思う。色々なテーマがあるし、新しい言葉を習えるので、とてもいいと思う。
	できるだけ作文を書いて、日本人や日本語を勉強している友だちに読ませて、もっと間違えがあったら直すと本当に役にたつと思う。
	予習シート、クラスメートとの意見交換、作文を書いて、先生に直してもらうということは全部授業の良いところだと思います。もう少し良くしたほうがいいところなら、読むことを上達させる可能性を増やしたらいいと思います。テキストを読んで、予習シートをするのは役に立ちましたが、この活動は宿題として完成されたものです。宿題なら、分からない言葉を調べたり、文章の意味をゆっくり考えたりする時間があるので、速く読んで、質問に答える能力がなかなか高められないのです。そこで、授業中に無意識の文章を紹介して、学生たちにクラスで読むよう頼んだり、読む能力の期末テストをしたりすればいいと思います。
この授業の活動の中でいいと思ったものを選んでください。（複数回答可）	「予習シート」「作文」6人
	「クラスメートとの意見交換」「発表」4人
読む、聞く、話す、書くを総合した読解の授業はどうでしたか。（記述式、3人回答）	日本語の勉強に役に立つと思います。
	本当に良かったと思います。全部の能力が改善させるために役にたったと思う。読むことはテキストの内容を理解して、確認する時改善させたし、授業での話し合いと音読の時、聞くと話す能力がもっと上手になってきた。書く能力ももちろん改善させた。
	だいぶ役に立ったと思います。先生とクラスメイトと共に話し合う可能性を通じて聞く、話す練習をし、作文を書いたり、テキストやクラスメイトの作文を読んだりすることを通じて読む、書く練習をすることができたのです。つまり、読む力、聞く力、話す力、書く力の四つが上達する可能性があったのです。

この授業を通して何を得たと思いますか。（複数回答可）	「言葉、表現」「書く能力」６人
	「文法」「発音、イントネーション」「読む能力」「話す能力」「発表する能力」５人
	「考える能力」「コミュニケーション能力」４人
	「聞く能力」２人

さらに、授業のオンライン実施に関わる質問と回答（表５）から、オンライン授業でも学習者の積極的・自発的な参加が可能であり、受講しているという感覚も対面授業と同様に感じることができること、学習者は現在の NUCT と Zoom を使ったオンライン授業にも十分満足しており、オンライン授業でも質問できなくて困る人はほとんどいなかったことが明らかになった。このようなことから、オンライン授業でも、授業方法において十分に配慮すれば、学習者の発言、質問、発表及び教材の提供にも問題がないと言えるのではないだろうか。一方、「教科書を用いた授業がいい」と答えた人が１人いたことから、教科書の使用については考える余地があると考えられる。 また、授業中にグループワークを取り入れてはいるが、「クラスメートと話し合ったり、先生に話したいことを自由に伝えたりする機会が少し足りなかった。発表は対面のほうがいいと思う」という意見があり、半数の受講者がグループワークのやりにくさと寂しさを感じていたことから、オンライン授業の限界が感じられ、学習者同士の活動時間の調整など、改善策について考える必要があると考える。

表５

質問	回答
この授業に積極的・自発的に参加しましたか。	「あてはまる」６人
授業で意見を言ったり、質問や発表したりできましたか。	
教材（パワーポイント、ハンドアウトなど）は役に立ちましたか。	
この授業で、対面授業のようにちゃんと授業を受けていると感じられましたか。	「あてはまる」３人 「ややあてはまる」３人

来年からの学生が、この授業を受けるとき、どのような方法が良いと思いますか。（複数回答可）	「Zoomなどによるライブ授業（対面対話できる双方向）」5人
	「NUCTなどによる電子教材を用いた授業」4人
	「教室などでの対面授業」3人
	「教科書を用いた授業」1人
オンライン授業で良かったと思うことを選んでください。（複数回答可）	「先生に質問しやすい」「宿題が役に立った」「家で勉強できる」5人
	「復習がしやすい」4人
オンライン授業で困ったことを選んでください。（複数回答可）	「ネット環境が十分でない」「グループワークがしにくい」「友達と一緒に勉強できなくてさみしい」3人
先生に話したいことや聞きたいことを自由に伝えることができましたか。	「十分にできた」4人 「少し足りなかったが、問題はなかった」2人
クラスメートと十分にコミュニケーションすることができたと思いますか。	「十分にできた」2人 「少し足りなかったが、問題はなかった」2人 「全然足りなかったから、もっとコミュニケーションしたかった」2人

最後に、表6のように本授業の感想を自由に書いてもらったが、これらの回答からも、4技能を統合した読解授業の有効性と、オンラインの十分な活用可能性が示唆される。

表6

質問	回答
この授業の感想や先生に言いたいことを自由に書いてください。（記述式、5人回答）	教えていただきありがとうございます。
	先生はよく説明したし、教え方もとても良いし、それで毎日の授業はとても面白かったと思う。
	NP5で一番気になった授業だった。二人の先生は本当に親切だし、私たちの意見と経験をたくさん聞いてくれてどうもありがとう。一番よかったと思うのは作文のフィードバックだった。いろいろ学んで、前より間違えが少なくて、具体的に書くようになったし、友達の作文も読んで違う意見を理解すできるようになったと思う。
	授業がオンラインになっても、とても役に立って沢山新しいことを勉強になりました。私の日本語能力を高めることができて嬉しいです。
	今学期は、大変な状況にもかかわらず、とても楽しかったと思います。教室等での対面授業ではなく、インターネットでの授業を受けていましたが、とにかくたくさん勉強になったのです。本当にありがとうございました。

３．４．２．授業内容（４技能の統合）により得られた効果と課題

本節では、４技能を統合した読解授業に関する授業評価アンケートの内容をまとめつつ、本授業で得られた効果と課題について述べる。

授業そのものに関する質問の回答から、本授業の受講生たちは、授業の内容に大変満足していることが分かった。特に、本授業で取り上げたテキストについて学習者たちは肯定的に評価していたが、３．２節でも述べたように、本授業では説明文、意見文、論証文、調査結果、インタビュー記事、エッセイ、物語など多様なものをテキストとして取り上げた。そのため、学習者はこれらを読んで、様々な文章の構成や書き方を学び、様々な分野の語彙や表現が学習できたと考えられる。また、これらのテキストの内容を理解し、それに関して考え、自分の意見を話し合ったり、調査したことを発表したりする活動を通して、テキストから得た知識を自分のものにして応用することができるようになったと思われる。特に、学習者たちの作文を通して、学習者たちが読んだ内容について自分で考え、調べた上で、テキストに倣って自分の意見を述べることができるようになったことが確認できた。例えば、「死刑制度廃止論」のような論証文を読んだ後、自分の立場と根拠を書かせた作文課題では、テキストのように、様々な根拠を上げて自分の主張を論証していた。また、インタビュー記事の「進路選択」を読んで、学習者同士でインタビューをさせ、その結果を記事にまとめさせた作文課題でも、テキストから学んだ表現を使い、インタビューした内容を分かりやすく説明・報告していた。また、授業目標通りに、学習者たちがテキストを読み、筆者の意見や根拠を理解し、その内容をまとめ、読んだ内容を説明できることも確認できた。ただし、学習者同士の意見交換につながるテーマであったとは言え、シラバスの前半に多少重い社会問題に関するテキストや難しい語彙や表現を使ったテキストを取り入れたことは反省点として残る。シラバスの後半にインタビューや発表などの活動が集中しており、日本文化に関する生教材を使った授業も６月～７月初旬に集中していたため、授業内容の配分に気をつけると共に、金城（1994）、大塚・植田（1994）なども指摘しているように、もう少し学習者の興味や

関心に合うテーマのテキストを用意してもよかったのではないかと考える。

さらに、作文、ピア・レスポンス、フィードバック、予習シート、クラスメートとの意見交換、発表が高く評価され、受講者が自らこれらの授業中の活動により自分の4技能が向上したと記述している点から、4技能を統合した読解授業は、学習者の全般的な日本語力の向上に非常にいい効果があると言える。今回は「聞く」に焦点を合わせた活動を個別に導入していなかったため、相対的に「聞く能力」が上達したと感じる学習者が少なかったが、「聞く」活動の追加に関しても今後の課題として考えていきたい。

また、本授業は中上級レベルを対象にしているが、実際の受講者のレベルは当然のことながら全く同じであるわけではなく、6人のうち2人は中級により近く、2人は上級に近かった。中級に近い2人は、作文や他の活動においては他の学習者に比べ日本語の間違いが多く見られた。しかし、テキストの理解においてはピアの助けを得て、真面目に頑張っていたため、全体的にはレベルの差による大きな問題はなかったと思われる。

3．4．3．授業方法（オンライン実施）により得られた効果と課題

今回は、30回全ての授業をオンラインで行ったが、教師にも学習者にも初めてのことであり、試行錯誤を重ねながら進めてきたため、心配なところが多く、授業が終わるまで緊張を緩めることができなかった。

まず、今回は、学期が始まる直前にオンライン授業の実施が決まったこともあり、教師も学習者も授業開始までZoomやNUCTの機能を十分に身につけることができず、NUCT、ネット、パソコンの状態も不安定なときがあり、授業が始まってしばらくは予定通りに進まないこともあった。特にスイスから受講していた学習者は、毎週月曜日と金曜日の0時45分から2時15分までの深夜に授業を受けることになり、体調の問題があるとき以外は頑張って真面目に参加してはいたが日本にいる他の学習者に比べ、時差の問題で授業を受けることが大変そうに見えることもあった。日本に

いる学習者でも、パソコンやネットの問題で授業（の一部）に参加できないことがまれにあった。

しかし、アンケート調査の結果から、オンライン授業でも学生の積極的・自発的な参加が可能であり[2)]、授業での発言、質問、発表及び教材の提供にも問題がなく、受講者達が十分満足していることが明らかになった。さらに、オンライン授業のほうが先生に質問しやすいと感じる人が多く、全員が対面授業のように授業を受けていると感じていたことから、オンライン授業でも対面授業とほぼ同じような学習効果と満足を学習者に与えることができると言える。一方、授業でペア／グループワークを多く取り入れたにもかかわらず、クラスメートとのコミュニケーションが足りなかったと感じる人が多かったことから、これに関するより繊細な配慮と工夫が必要であると考えられる。

2020年度春学期は国際言語センターだけでなく、名古屋大学の多くの授業がオンライン実施となったため、学習者たちの学習量、課題量に相当な負担がかかっていると言われ、心配していたが、アンケートの回答から、本授業の課題（予習シート、作文）は中上級の学習者にそれほど負担ではなく、オンラインでも十分効果的に実施することができることが明らかになった。 しかし、今回の授業で使用したNUCTとZoom、メールに加え、ネット上でリアルタイムで学習者と一緒に作業できるツール（例えば、Google Classroomなど）も利用すれば、より学習者の負担を減らした効果的な授業ができたのではないかと考える。また、本授業で気をつけていた丁寧なフィードバックに対して学習者達が高く評価していたことから、学生にただ読ませ、言わせ、書かせるだけでなく、それに対して丁寧にフィードバックすることも非常に大事であることが明確になった。

ただし、フィードバックについては学習者の人数が多い場合のことも考える必要がある。今回は6人であったため個別に対応することもできたが、人数が増えた場合も教師に過度な負担がかからないようなフィードバックの方法が必要である。今回、個別のフィードバックに対面時よりも時間をかけたのは音読であるが、人数が多い場合は、学習者たちが読み間

違えた箇所をピックアップしてテキストに示し、全員で確認し、再音読をすることで、意識を向けさせることができるだろう。

また、作文については今回も取り入れたピア･レスポンスが有効である。ピア・レスポンス後の最終的な教師からのフィードバックは、上に述べたGoogle Classroomなどのツールの使用によって、オンライン時の負担が軽減できると考える。学習者の環境によって使用できない場合もあり注意が必要であるが、学習者とドキュメントを共有すれば、リアルタイムに学習者の修正を確認してその場でコメントすることが可能になるので、時間も短縮できる。その他、人数が多い場合は、作文の分量や回数を調整することも考えられる。

さらに、今回前もって予習した内容をまとめて提出させ、フィードバックしていた予習シートの代わりに、授業中に簡単な選択式の小テストをしたり、ペアやグループで内容確認シートを授業中に書かせて読んだ内容を確認することで、学習者と教師の両方の負担を軽減することもできると考えられる。このような授業中の小テストや内容確認シートなども、Google Classroomなどのツールを利用すると、教師が授業後に学習者たちの提出物を一つ一つ添削しなくても、授業中にその場で確認してフィードバックすることができ、より効果的かつ効率的なフィードバックが可能となるだろう。

以上のように、人数が多くても対応できる、時間の短縮や教師の負担軽減を考慮したフィードバックは必要であるが、全体に向けて単に「学習者が間違えやすい点」として示すだけでは、間違いに対する学習者の意識が薄れがちになるので、成果物を学習者と共有し、ツールを有効に使って、自分の間違いを確認させながら進めていくことが大切であると考える。

また、本授業では、自習の時間とZoomで話し合う時間の配分が難しく、常に調整し直しながら進めていた。当然のことながら、学習者間のレベルの差やネットの状況などにより、作業時間にも差が出てきたが、しばらくは毎回学習者たちに作業時間について確認し、調整するしかなかった。これに対して、6人のうち4人が時間配分がちょうどよかったと感じていた

ことから、自習時間と Zoom による双方向授業の時間についても、十分に気をつけて調整すると、問題なく授業を行うことができることが分かった。

しかし、やはり教師側では、オンライン実施により、自習の時間に学習者がきちんと作業しているのかについては確認ができず、Zoom でもブレークアウトセッションに入っているときは全てのセッションの様子を同時に確認することができないため、進み具合や集中度、理解度、日本語の使用度などを確認することも容易ではなかった。みんなで話すときや各セッションに少しずつ入るときは様子を確認することができたが、対面授業に比べると限界があり、困っている学習者や与えられた課題が早く終わった学習者に対するフォローも十分だったとは言えない。

それでも、オンライン授業により場所の制約が無くなり、自国や自分の部屋で気楽に授業を受けることができるようになったことや、時間的にも出かける準備をする時間や移動の時間が無くなったことは、オンライン授業のメリットだと思われる。また、人前で話すのが苦手な学習者も、オンラインでは心理的な負担が軽減し、より自由に発言できるようになった点もいい点として挙げられる。ネットの状況によるところは大きいが、オンライン授業でも Zoom でのリアルタイム授業の時間には十分に自由な意思疎通ができ、ブレークアウトセッションでペア / グループワークも可能で、音読の FB を通して発音のチェックと矯正も問題なくできたため、授業の質も対面授業に比べて決して劣ることはなかったと考える。

4．おわりに

本稿では、2020年度春学期に国際言語センターで実施された「NP 5 読解表現」の実践報告を通して、4 技能を統合した中上級読解授業のオンライン実施とその結果について記述した。

「NP5読解表現」の授業では、中上級レベルの交換留学生 6 人を対象に、様々なテーマの読み物をテキストにし、インプットとアウトプットの関係を学習者にも意識づけ、「読む」だけでなく「聞く」「話す」「書く」にも

比重をおいて音読、小テスト、学習者間の意見交換、作文（ピア・レスポンス）、発表などのアウトプット活動を多く取り入れた。また、決まった授業時間をより効率的に使うために、毎回自習時間と Zoom での双方向授業の時間を分けて実施した。自習を入れた分、音読、予習シート、作文のチェックとフィードバックはより丁寧に行い、オンラインでの授業でもピアでの学びを重視し、アウトプットの機会を増やすために、作文においてピア・レスポンスを行うなど、ペア / グループワークにも力を入れた。また、内容理解の向上のため、教材を視覚的に提示し、総まとめとして発表を取り入れ、オンライン授業の限界を乗り越えようと努力した。

その結果、授業評価アンケートで「4技能を統合した読解授業」と「授業のオンライン実施」において、両方とも肯定的な反応が見られ、4技能を統合した読解授業は学生の満足度及び能力向上において効果が高く、それをオンラインで実施しても十分効果的であることが明らかになった。

今後は授業評価アンケートから得た課題を検討し、より効果的で質のいい授業を目指して改善していきたいと考える。

注）

1）NUCT（Nagoya University Collaboration and course Tools、名古屋大学情報連携総括本部で教育学習支援システム Sakai を用いて開発し、運用している e-Learning システムの一つで、通信ネットワークを使った授業のホームページを運用するための Web アプリケーション（出典：https://ct.nagoya-u.ac.jp/access/content/public/student_manual.pdf））

2）受講者が「授業に積極的・自発的に参加できた」と答えていることから、4技能を統合した授業の効果として先行研究で述べられていた「学生が主体的に参加できた」という結果と同じ結果が得られた。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

犬塚美輪・清河幸子（2013）「『一人で読む』を超えて－ピアは理解をどう変えるか」

中谷素之＋伊藤崇達『ピア・ラーニング　学びあいの心理学』pp.91-104、金子書房

大塚純子・植田栄子（1994）「地域社会との接触をとりいれた日本語学習者によるビデオ制作活動について」『日本語教育方法研究会誌』１巻２号、pp.28-29、日本語教育方法研究会

金城尚美（1994）「四技能を統合した日本語教授法―プロフェクト・ワーク―」『言語文化研究紀要：Scripsimus』３、pp.53-86、琉球大学教養部

栗下典子・伊東英（2018）「Book Talk による英語多読への意欲づけと４技能の総合的養成による読解力の向上：公立中学校における実践例」『岐阜大学教育学部研究報告．教育実践研究・教師教育研究』20、pp.149-158、岐阜大学教育学部

鄭聖美･沖田弓子･木戸光子･田中孝始･ブッシュネル　ケード　コンラン（2014）「作文活動を中心とした四技能の統合：初級後期クラスにおける試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29、pp.155-172、筑波大学留学生センター